

兵士論によせて〔研究短信〕

岩崎 稔

〔はじめに〕

1995年の戦後50年の節目の年に私は『或る戦いの軌跡—岩崎昌治陣中書簡より』（近代文芸社）という日中戦争に出征し戦死した、伯父の軍事郵便を編集出版したが、当時、私自身の歴史認識の不足から自著に対して不十分な解説しか与えることができなかった。そのことへの反省があり、以来、自著の不十分かつ不正確な歴史認識を正す必要と兵士の書簡に再び向き合う必要に迫られていた。その歴史認識の根幹となった問題軸は、アジア・太平洋戦争とは何であったのか。日本軍は中国戦線で何をしたのか。普通の日本人が兵士として加害者になっていったのはなぜか。そもそも侵略とは何かという、一連の問いであったが、これらの問いを兵士の軍事郵便から再度正確に解説する必要に迫られていた。戦後50年の1995年前後から、戦争の評価と戦争責任の問題がさまざまな形で取り上げられたが、その中でも特に南京大虐殺は戦争責任問題の中心として論議されただけに、よけい気になっていたのである。そんな矢先に2013年8月、東京唯物論研究会の夏期特別研究会《アジア・太平洋戦争の戦争責任・植民地（支配）責任、そして戦後責任を問う》が、開催された。私にとっては自著の不十分な歴史認識を問い直すことがアジア・太平洋戦争の戦争責任・戦後責任並びに植民地責任を問い直すことと同じ意味をもつものと考え、岩崎昌治の軍事郵便を素材として兵士の視点から改めて考えてみようと思った次第である。

〔兵士への視点〕

軍事史における兵士の全面的な主題化を加速したのは、1990年代という時代状況であつたらうといわれている。歳月とともに風化を免れなかった意識のなかでの戦争は、95年の戦後50年を軸に急速に蘇ってくるとの観を呈した。日本軍が中国戦線において何をしたのかという戦争責任と戦後責任を問おうとする問題意識が、この加速化の根底にあった。兵士への視線の浮上は、人びとの暮らしの場である地域にとっての戦争の意味の変容をもたらした。兵士を対象化するとき「軍事郵便」は兵士への不可欠な通路であった。ここに兵士にとっての軍事郵便の重要性が改めて提起された。近年における兵士を主題とする作品の輩出は「国家が戦争をしたという視点から一人ひとりが戦場へゆかされ、またいったという視点への移動であった。その意味では、極言すれば軍事史は、国家史の主題から民衆史の主題へと移りつつある」（注1）といわれている。

〔昌治書簡を素材にした二つの兵士論〕

軍事郵便を素材として扱った著書のなかで、特に拙著の岩崎昌治書簡を素材にした著書を参考にして、私は6つの論点（注2）について考察を進めているが、このうちの一つを今回報告することにしたい。ここでの眼目となるのは、日本軍は中国戦線で何をしたのか。そ

して普通の日本人が兵士として加害者となっていったのはなぜか、という点である。

藤井忠俊著『兵たちの戦争―手紙・日記・体験記を読み解く』（朝日選書・2000年12月刊）のなかで、「南京事件に居合わせた兵の書簡を一つあげておく」として、1937年12月17日の昌治書簡を取り上げている〔注3〕。「揚子江と言ふ大きな河には支那人の死体が五六千人有ります。人を殺しているのか何をやって居るのかわからなくなってしまいます。今の所南京も静かなものです。戦争と言ふものが終わった様な気がします。時々敗残兵が出て鉄砲を撃って来ます。帰る事も近いでせう。」事実の証言は別にたくさんあるので、兵の心理に注目してみよう。南京大虐殺と、戦争の終わりを結びつけており、帰還の夢もかなうと言っているようだ。」と述べている。「同じ別便では、一二日のこととして、「敗残兵七十七名を取って其の場で銃殺しました。さすがに支那正規兵、見事な死方をした者もありました。立派に吾等の銃口の前に立って笑って死についた者さえありました。」この書簡に対しては「この明らかな捕虜でも、捕虜という感覚ではなく、敗残兵と認識している。」以下、何が問われているか、最後まで引用してみよう。この「数行あとには一四日のこととして、「敗残兵約八百名位我等工兵の手で揚子江の川べりで銃殺しました。人を殺して居るのか、竹でも河に流す気か自分でもわからないほどでした」とある。やはり敗残兵認識だが、殺し方は「銃殺」として処刑であることを述べた。「時々ドーンドーンと音のするのはまだ殺し切れぬ敗残兵を殺して居る音です。」この観察からも「敗残兵」（～捕虜）はみな「殺す」というきまりがあるように書かれている。命令がなければ兵だけでこのような処置は無理だろうと思われる。しかし、兵がこれをどう認識し、どう納得したかは民衆史としての問いなのである。」と述べ、南京大虐殺が「敗残兵（＝捕虜）の集団的殺害（＝殲滅）」を意図した、紛れもない組織的な殺害であったことを書簡から読み解いている。さらに「またその数行あとには、なぜ皆殺しにするかの観念が記されている。「敗残国民は哀れなものです。幾度も手紙に書いたが一人も残しては居く事が出来ないのです。何故なら彼等が一名でも生きて居たらどうなります。日本軍も戦地では観兵式で見る様な兵隊様ではなくなります。相当に自分の部下を、戦友を殺し傷つけて居る為、気でも狂って居る様です。支那人さえ見れば、『やっつける』で、すぐに永の旅です。」岩崎の一二月一七日の書簡は、日本兵における戦争の論理、中国人を殺す論理は単純にうかがえる」として、「そこには、戦争の目的と目標が認識されることなく、勝つか負けるかの指標が極めて高いところにあることがうかがわれる。勝つとは殲滅しきることであり、敗残国民は無茶苦茶な目に遭わされてもしかたがないことだというイメージに支えられているようだ。その現場では、日頃見るカッコいい兵隊さんではなく、異常な所業を見せる。「支那人さえ見れば、やっつける」と短絡した行為につながっていく。そのあとには「皇軍の為、日本の為に彼等を血祭りに上げて居るのです。この気持は私一人ではない。分隊全員（全員一六名中二名死、五名負傷）、いや中隊全員が此の気持です」とある。私（藤井忠俊）は、戦争の目的認識よりも「皇軍」認識のほうが強く働いている兵の心理をみる。また、これは、これほどの強烈な事件を知らない銃後の民衆の場合も、似たような思考回路になっていきつつあったことを考えておきたい。」と昌治書簡を

読み解いている。

これらの「殺す」という行為が、兵士のなかでいかに自己目的化していったかの例を、さらに緻密に書簡のなかに追っていったのが、鹿野政直著『兵士であること—動員と従軍の精神史』（朝日選書・2005年1月刊）である。この著書のなかの「村の兵士たちの中国戦線—岩手県和賀郡藤根村・高橋峯次郎宛通信をおもな素材として」は、『国立歴史民俗博物館研究報告』（第101集、2003年3月）に載った原題「軍事郵便にみる兵士—高橋峯次郎宛通信をおもな素材として」を改題したものである。これは国立歴史民俗博物館で設定された基幹研究「歴史における戦争の研究」とその枝分かれというべき「近現代の兵士の実像」（代表者藤井忠俊）の共同研究の成果とされ、この研究報告のなかで、高橋峯次郎宛ての軍事郵便と共に昌治書簡が検討されている。神奈川県中郡相川村戸田の農家の生まれの工兵岩崎昌治は、1937年（昭和12）9月2日に応召、中国戦線に送られたが、「上海に上陸し、その周辺地域へ道路補修などに派遣された岩崎のみたものは、戦闘のあとの惨たらしさであった。「家を焼かれ、土地を追われた彼等土民のあはれさは如何戦争が一いや敗戦の民のかなしさ、戦に人情は不要とは言ひ乍ら他人事とは思へない」（一九三七年十月二十二日付）、「支那は丁度大正十二年九月一日の東京市と思へば間違い無いでせう。彼等が日本をうらむのは無理ないでせう」（同日付）。後者の場合を除いて、破壊をもたらした者が誰かへの省察=当事者意識の自覚が乏しく（それは「戦況」として捉えられている）、また、住民を「土民のあわれさ」とする視線の所産であるとともに、眼前の悲惨と対比的に「日本人と生まれた事は幸福」に収斂する感想であったが、それでもそこには、彼らを生活する人びととする認識があった。それだからこそ彼は、現役兵として入営する弟忠治を、「出来る事なら此の事変に参加させ度い。そして支那と言ふ『土地』に一つは興味を与へ如何に広く、如何に豊かゝを知らせ度い」とも書き送ったりした。だが参加した南京攻撃戦は岩崎を変えた。「南京の下関駅（支那語でゲカンシャキョウ）を工兵隊が占領したのが十四日未明です。時に敗残兵約八百名位我等工兵の手で揚子江の川べりで銃殺しました。人を殺して居るのか、竹でも河に流す気か自分でもわからないほどでした」、「今日は南京の入城式です（中略）。揚子江の河べりだけでも約五千名位の死体のごろごろして居ります。海にいる魚で『イルカ』と言ふのが死体を食ひにどンドン上がって来ます」（一九三七年十二月十七日付）。この日の午前中、岩崎は巡察にでて、午後は休養となっていた。その休養時間中に彼はこの手紙を書いている。揚子江の光景は巡察中にでも見たのであろう。でもそれは、強く突き刺さる異常としてよりは、もはや平常のなかに埋め込まれた光景の一つとなっていた。それゆえに彼は、一呼吸おくつもりか改行して、こう続ける。「のんびりとした気分です。下関駅の表窓により外を眺めて久し振りに内地の人のことを思い出して居ります」。そうした「のんびりとした気分」を現実に立ち帰らせるのは、岩崎の表現を借りれば「ドーンドーン」という「まだ殺し切れぬ敗残兵を殺して居る音」や、「時々風の吹き廻してやって来」る「死体を焼いて居る一種別な悪い臭ひ」であった。そのことが彼を、殺戮という行為についての理由づけを迫る。「幾度も手紙に書いたが一人も残して居く事が出来ないのです。何故なら彼等が一名

でも生きて居たらどうなります。日本軍も戦地では観兵式で見る様な兵隊様ではなくなり
ます。相当に自分の部下を、戦友を殺し傷つけて居る為、気でも狂って居る様です。支那人
さえ見れば、『やっつけろ』で、すぐ永の旅です」。こう書いてきて彼は、みずからも加わっ
た殺戮への疑念を何としてでも払拭せねばとの気持に襲われたのであろう、「皇軍」「日本」
という“大義”をもちだすばかりでなく、国民にも同意を求めるに至る。「彼等一名でも生
きて味方の陣地に帰ったら、さもなくも宣伝上手な支那人です。どうなるか。皇軍の為、日
本の為に彼等を血祭りに上げて居るのです。この気持は私一人ではない。分隊全員〔全員十
六名中二名死、五名負傷〕いや中隊全員が此の気持です。内地に居らるゝ人も此の気持、苦
しい気持良民と判って居ても殺さなければならぬ気持は良くわかってもらへるでせう」。
そこでは、上陸当初は幾らかはみられた生活者としての中国人との観念は消え失せ、中国人
＝敵＝抹殺すべき存在との意識が、それにとって代わっている。と同時に、破壊を「戦況」
と捉え、その意味では当事者性が希薄だった姿勢は（それはもともとは、みずからを破壊の
当事者＝主体とする意識の希薄だったことにほかならないのだが）、積極的に殺戮の当事者
であることをためらわない姿勢へと踏み込んだ。それでいて、手柄をたてたとか凱歌をあげ
たとかからは遠い、重苦しい気分が彼を包んでいたことが読みとれる。事態の正当化には
「皇軍」「日本」を掲げるほかなく、そのことがいっそうそれらの価値に縋りつく意識を強
めもしたであろう。」（注4）と述べている。

〔南京大虐殺と二つの兵士論〕

これまで「軍事史は、国家史の主題から民衆史の主題へと移りつつあること」つまり、「国
家が戦争をしたという視点から一人ひとりが戦場へゆかさされ、またいったという視点へと
移動した」ことを述べ、次に、その兵士の視点（注5）から、拙著『或る戦いの軌跡』の兵
士書簡を素材として取りあげた二つの著書を取りあげたが、それらは共に、兵士がなぜ殺戮
を自己目的化するにいたったのかという、兵士の「殺す」という行為への考察にあった。こ
の二つの兵士論は、共に、兵士の虐殺の精神史、つまり南京虐殺の狂気の本質を兵士の側か
ら捉え直す作業であった。そこで問われたことはまさに南京アトロシティーズといわれる
南京大虐殺の本質を兵士の側から問うたものであった（注6）。「南京大虐殺または南京残虐
行為といわれる事件は、(1)、捕虜の集団殺害、(2)、敗残兵剔出という名でおこなわれた兵士
や市民の処刑、(3)、さらに女性への強姦致死をふくむ一般市民への残虐行為を総称したもの」
（注7）である。第一に、1937年12月13日に南京を占領した日本軍は、その前後に生じ
た多数の中国兵の捕虜を集団的に殺した。これはまぎれもない大虐殺である。南京での犠牲
者のなかでもっとも多いのが捕虜の虐殺によって生じたものであり、それが無差別にしか
も組織的におこなわれたことこそが問題なのである。第二に、包圍殲滅戦（注8）となつた
南京では、大部分の中国兵は戦意をなくして敗走した。その多くは投降兵・敗残兵として殺
害されたが、捕虜として収容する前の最中であつたとしても、武器をすて抵抗の意思のない
ことをしめしているものをその場で殺すことは、あきらかに人道に反する大きな戦争犯罪

である。南京市内で逃げおくれた中国兵の多くは、武器をすて軍服を脱いで、難民区に逃げ込んだ。これにたいし日本軍は、占領の直後から敗残兵の掃討と便衣兵の剔出をおこなった。第三に、捕虜の殺害以上に不法な虐殺というべきものは、非戦闘員である一般市民の殺害である。少なからぬ市民が不可避的な戦闘の巻きぞえではなく、日本軍将兵の意識的な行為によって犠牲になったことが、南京アトロシティーズと呼ばれるゆえんである（注9）。

さて、最後に南京虐殺の狂気の本質を兵士の側から捉え直すとどうなかをみよう。

それは第一に、「戦争の目的と目標が認識されることなく、勝か負けるかの指標が極めて高い」ことが、指摘されている点である。これは、日本軍がもたらした破壊を「戦況」と捉えることと同義である。したがって、勝つとは殲滅しきることであり、敗残国民は無茶苦茶な目に遭わされてもしかたがないことだというイメージに支えられることになる。だから皇軍によってもたらされた惨状「戦闘のあとのむごたらしさ」の原因は「敗戦の民のかなしさ」となり、反転して、それは「(勝戦国の)日本人に生まれた事は幸福」という感慨に直結していく。みずからが破壊した結果としての惨状が、敗けた国はあわれとの感懐を誘い、敗けてはならぬとの覚悟を強めさせる。これは何と身勝手な論理なのだろう。日本兵の意識の奥にあった中国人への差別・蔑視観の深さを映し出しているようだ。

第二に、上海に上陸した当初は幾らかみられた中国人を生活者とする認識が、中国人＝敵＝抹殺すべき存在（皆殺し＝殲滅）との意識に取って代わられる背景にあったものは何であったのか、という問いである。上海戦の思わぬ苦戦と甚大な損害の結果が、日本の兵士に中国兵に対する敵愾心を起こさせ、さらに、その兵士の敵愾心が、中国の一般民衆に向けられたこと、それが「支那人さえ見れば、やっつけろ」という、短絡した中国人の殺害行為につながったといえるだろう（注10）。また、日本軍の兵士が中国軍と交戦し敵対するなかで、敵は中国軍のみならず、非戦闘員である「生活者としての中国人」にまでひろがり、《抹殺すべき存在》として彼らが日本軍の眼前に迫り上って来る。その状況が、すべての存在を《敵か味方か》に峻別することを迫る。それゆえすべてが味方でなければ敵であり、敵でなければ味方であるという、敵か味方かという二つに分類する単純思考へと頹落させていく。したがって《味方でも敵でもない生活者としての概念》が兵士のなかで消え失せる。味方があって敵が存在するのではない。敵でも味方でもない生活者としての中国人が日本軍にとって敵とみなされるようになったのは、日本軍が非戦闘員である中国人を敵とみなすようになったからである。日本軍から敵とみなされたとき、全中国人が日本軍の敵となったのである。全中国人が敵とみなされるなら「支那人さえ見れば『やっつけろ』』となるのは兵士側からすれば当然であり、そればかりか殺戮を積極的に位置づけるために「皇軍の為 日本の為」という“大義”が身にまとわれる。

第三に、戦争はただの殺戮ではなく、敵の殲滅にほかならないから、もともと自分の敵でない国家の敵を殲滅させるために、兵士は「皇軍」「日本」などの国家の言葉のなかに溶解していく以外にない。殺戮を正当化するために「皇軍」「日本」がかかげられたのではなく「皇軍」「日本」をかかげるなかで殺戮がおこなわれたのである。兵士の「殺す」という行

為をささえていたのは「皇軍のため」「日本のため」という大義であった。「多くの日本の民衆が戦争目的がはっきりしていると思っていたのは、それが「聖戦」と言われたからであり、戦いにおもむいたのは「皇軍」だったからである。兵にとっての戦争目的は、「まつろわぬものどもを討ち平らげる」ことであって、正義の源は、日本軍が天皇の軍隊すなわち「皇軍」であり、「皇軍」にまつろわぬものは逆賊であり、それは討ち平らげなければならないというのが「聖戦」である。こうして、皇軍でありさえすれば正義であるとの虚構が設定されている。そして、実態としては、だからこそ「皆殺し」にしなければならないというように、戦いの目標設定を欠いたものにならざるをえない。信じられないような南京大虐殺はこうした戦争目的、作戦目標のないところに、皆殺しイメージが支配したもので、それが「殲滅の思想」なのである。」(注 11)。

第四に、この「殲滅の思想」とともに、もう一つの思想が「徴発の思想」であることに注意を向ける必要がある(注 12)。上海戦にひきつづいて第一線を急進させた南京への追撃戦が、後方補給をまったく無視して進軍した結果、その間の食糧のほとんどを現地での徴発でまかなった。それが日本兵による「略奪」であった。そして、この略奪には、暴行・強姦・放火・殺害がともなったのである。南京大虐殺は、日本の侵略戦争における戦争犯罪を象徴する事件であるといえるが、中国を侵略していながら、そもそも破壊をもたらしたものは誰かの省察が兵士にはなく、みずからを破壊の当事者＝主体とする意識の希薄ばかりでなく積極的に殺戮の当事者であることをためらわない姿勢へと兵士は踏み込んでいくのである。

[おわりに]

さて、終わりに兵士の虐殺の基礎にあったものは何であったかを考えてみよう。思いやりの深かったであろう生活者を、同時に惨劇の遂行者にしてしまうところに、戦闘のもつ心身への食い込みの深さをみるが、そこで、思考を停止させてはならない。家族への思いやりが戦場では残虐さとして発揮されてしまう、というありかたこそが問われるべきものなのであろう。もう一步突き詰めれば、家族への思いやりの閉塞性こそが戦場での残酷さの根源ではなかったろうか。数多くの軍事郵便にみられるように、大半の兵士が家族や故郷を背負って戦地に赴いたからである。兵士は家族や郷里のために皇軍、日本として戦っていたのである。その思いやりは「中国人の家族への思いやりなどは踏みにじっても構わないような思いやり」に他ならなかった。兵士の郷里への鞏固な意識、農民としての鞏固な郷土意識(郷里の期待にこたえようとする意識)が兵士の《報恩の鞏固な意識》を生み、兵士たちの“遅れをとらぬ”精神、“後ろを見せぬ”精神という、戦闘意欲と軍務への精励を支えた。故郷や家族への思いが兵士の虐殺の構造の基礎にあったようにおもう。だから戦争での殺戮は残虐な性格の兵士によってではなく、優しい性格の兵士によって惹き起こされたことを忘れてはならないとおもう。人間の精神は、ここでは惨憺として引き裂かれている。ここに戦争の狂気の本質があるといえるだろう。

- 注1 鹿野政直著『兵士であること—動員と従軍の精神史』（村の兵士たちの中国戦線1兵士に向かう視線）111頁。
- 注2 (1)、研究史—兵士へと向かう視線と軍事郵便。(2)、兵士の肖像—岩崎昌治の人物像。(3)、日本軍は中国戦線で何をしたのか。(4)、普通の日本人が兵士として加害者になっていったのはなぜか。(5)、占領地における「討伐」と「宣撫」。(6)、戦死とその後、村葬と招魂式。ここでは、(4)についての内容紹介をしていく。
- 注3 前掲『兵たちの戦争』131頁～133頁。
- 注4 前掲『兵士であること』183頁～186頁。
- 注5 「兵士という存在は、自分の人生を中断されたという意味において被動者でありました。しかし戦場をかけめぐるという点で主動者でした。生命を中断されるという意味で被害者でした。しかし戦場に出て闘ったという意味において加害者でした。」（前掲『兵士であること』19～20頁）。
- 注6 この点で拙著『或る戦いの軌跡』にみられる兵士書簡は兵士の側からの加害事実の根拠を多く提供するものとなったといえよう。
- 注7 藤原彰著『南京の日本軍—南京大虐殺とその背景』大月書店（1997年）66～67頁。
- 注8 「南京攻略戦において日本軍は、上海戦から撤退してゆく中国軍の追撃殲滅戦と、南京防衛軍に対する包囲殲滅戦という戦法をとった。投降兵・敗残兵・捕虜であろうとも、中国兵であった者は（そう思わなかった者をふくめて）殲滅、つまり皆殺しにするということである。」「日本政府・軍部が日中全面戦争の口実にした「支那膺懲」という思想そのものが、天皇の軍隊＝皇軍にたいして屈服してその配下に下らないものは、武力で征服し、討ち懲らしめるというものであった。それは、中国民衆が生きて生活する場所に侵入し、彼らの生活を破壊しておきながら、日本軍に敵対したり、あるいは協力しない民衆を抗日的と見て、さらに抗日的と疑うだけで「膺懲」してしまうようになった。」（笠原十九司著『南京事件』岩波新書（1997年）95～96頁）。
- 注9 藤原彰著『新版南京大虐殺』岩波ブックレット・シリーズ昭和史 No5（1988年）。
- 注10 吉田裕著『天皇の軍隊と南京事件—もうひとつの日中戦争史』青木書店（1986年）（43～44頁）。
- 注11 前掲『兵たちの戦争』第二章「侵略の戦場—日中戦争の日記」4「徴発の思想」（117頁～）と5「殲滅の思想」（124頁～）で、この問題を取り上げている。
- 注12 前掲『兵たちの戦争』（128～129頁）。
- 〔2014年10月5日脱稿『唯物論』東京唯物論研究会機関誌・投稿原稿〕